
うしなったもの、まもるべきもの

茶山ぴよ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

うしなつたもの、まもるべきもの

【著者名】

Z8956D

【作者名】

茶山ひよ

【あらすじ】

14日更新しました みんなに追いつきたくて、焦って捨てた「はじめて」。気軽に始めたエンジョ。『みんな陰でやつてる』と思えば罪悪感も、あっけなく消えたはずなのに……。数年後、本当の幸せをつかみかけた亜莉紗に、忘れたはずの過去が突然襲いかかる。週2回程度の不定期連載中。

1 あたしは、人を殺した。—1（前書き）

この小説を中学生未満の方が読む場合は、保護者の許可を得て読むようにしてください。

中高生の方へ。

この小説は探偵小説や興味本位の性行為を描写するものではありません。

そんなメッセージをこめた小説です。

1 あたしは、人を殺した。ー 1

気がつくと、あたしはびしょぬれで突っ立っていた。

停止した思考。

胸が痛いほど苦しい息。

ドンッ、ドンッ、と体中を揺らすような血のリズム。

ぼぼ回じリズムで「ンッ、」「ンッ」と激しく響くような頭蓋骨。

それがあわせるように、髪から裾から、水滴がぽたぽたと床に落ちていく。

なすすべもなく、突っ立っているけれど、

眼は黄色っぽい光景を、

耳は絶え間ない水音を、

捉えている。

黄色っぽい灯りに照らされたここは、ラブホテルのバスルーム。

絶え間ない水音は、目の前のバスタブのジャグジーの音。

大量の泡が、水面を騒がせているから「それ」はよく見えない。

あたしは無意識にジャグジーのスイッチをオフにした。

泡が止まって、静かになつた水面の下に、「それ」 いやさつきまで藤本、といつ名前の男 が沈んでいた。

と、男の視線を感じた気がした。

あたしの前がはだけていた。

ホテル備え付けの短い浴衣みたいな、帯でしめるへんてこな服。

下着も付けずにはおつっていたそれの帯がほどけて、あたしは、ほとんど裸同然だつた。

さつきの 必死の格闘のせい。

さつき、無我夢中で あたしはこの男をジャグジーの泡の底に押し付けよつとした。

最初からわかつよつと思っていたわけではない。

ジャグジーに浸かつたまま眠つてゐるアイツを見たとたん……気がついたら体が動いていた。

お湯の中に沈められた男は田を覚まし、抵抗しようと湯の中で暴れた。

ジャグジーの泡以上に湯が波立ち、あたしはびしょぬれになった。

力を抜いたら、最後。力を抜いたら、あたしの終わり。

『ア莉紗ちゃんが昔、何をしていたか、彼に教えちゃおうかな~』

絶対にそんなことをさせない。

ジャグジーの中で男の上に馬乗りになり、その顔を湯の上に出すまいとあたしは渾身の力を込めた。

泡にくぐもつたうめき声が聞こえて　　ふつと男の体から力が抜けた。

ほんの5分前の出来事だ。

はだけていた前をあわせようとしたあたしだったが、そんな必要はないことに気づく。

眼も口もむすびあげたまま、湯の底に沈んでいるけれど。

もつ見えてないのだ。

その口からは泡ひとつ立てるとはないのだ。

「バー力」

あたしは水面の下にいる藤本につぶやいた。

声がうわずっているのがわかる。

あいかわらず、体中が震えるよつた動悸。

『バー力』の『ー』の部分が情けなく震えてしまつていて。

だけど、あたしは口に出さずにほいられなかつた。

「あんたが悪いんだからね」

死体はもぢりん返事をしない。

田を見開いたまま沈んでいるだけだ。

「仕方がなかつたんだから」

そつ、全部、こいつが悪いのだ。

やつとつかみかけた、あたしの幸せ。

『ア莉紗が22歳になつたら、籍を入れよう』

そういうてくれた涼。

あと1か月なのに。

あと1か月で幸せになれるのに。

それを壊そつとするヤツは 一いつするしかなかつた。

あたしは、たつた今、人を殺した。

2 あたしは、人を殺した。—2

なんだか、臭い。

お湯が臭う氣がして、あたしは藤本が沈んでいるバスタブの栓を引つ張った。

人は死んだら 垂れ流しになるつていうけど、もしかして、それ？

ううん。

そりじゃなくとも、50歳をすぎたオヤジの藤本からは加齢臭みたいな独特の臭氣がした。

さつき、4年ぶりに抱かれたとき。

それは、以前よりも強くなつた氣がして。

あたしは、以前よりもねちっこくなつた行為そのものよりも、その汗が体に染み付くのが嫌でたまらなかつた。

いや、藤本でなくとも。

たとえ、いつさいの体臭のない男だつたとしても。

嫌悪感はかわらないだろ？

も、涼以外の男になど、絶対に抱かれたくなかったから。

涼だけのあたしでいたいから……。

バスタブのお湯は「ううう」と音を立てて排水口へと流れて行き、藤本の裸体を丸見えにした。

本当に死んでいるんだろうか。

なんだか死んでる気がしない。

むへつと起きてきたような気がする。

起きて、また言い出しそう。

『アリサちゃんが昔、何してたか、彼氏に教えちゃおうかな～』

そう、1週間前。

突然現れたこいつは、確かにそいつだった。

絶対に、それだけは困る。

絶対に涼にだけは、知られたくない。

その弱みにつけこんで、ここはあたしをここに連れ込んだのだ。

『黙つてほしかつたら、俺のいとおりこしや』

あたしが昔、していたこと。

それは。

ハンマー……援助交際をしていたこと。

3 あたしは、人を殺した。— 3

あのときは、本当に、軽い気持ちだった。

おしゃれな服。

新しい色のグロス。

ブランドの可愛いリュック。

欲しいものはいくらでもあるのに、お金がついていかなくて。

時給650円のファミレスのバイトに比べたら、『えつち』 しただけ万札をもらえるのははるかに魅力的だった。

女子高校生。

一生で一番、女としての価値が高いとき。

それを無駄にするのはもったいない気がした。

「みんな陰でやつてる」

そう自分に言い聞かせたら、『売春』と云ふ言葉も、罪悪感も、あつけなく消えた。

あのときの相手の一人が、この死体。

藤本。

優しくてHツチなおじさん。

お金をいっぱいくれて、いい人だと思っていたのに。

なんでこんなことになっちゃったんだろ？

あたしはバスタブの中の藤本に田をやる。

田があいたままだ。

当然、またたきもしない。

気持ち悪いけど、本当は触りたくもないけど、あたしはそのままただけ閉じてやつた。

お湯に浸かっていたせいか、生きてるよつて温かい。

本当に死んでるのか疑わしい、だけど。

あたしが顔にふれたはずみで、口の端からお湯がこぼれた。

見ると仰向けに倒れた半開きの口の中には、お湯がそのまま溜まっていた。

藤本は半開きの口の中にお湯をためたまま、じぼ、ともいわす横たわっていた。

生きている人間が、口の中、こんなふうにお湯をためることなど、あつとない。

だから、やつぱり死んでいるのだ。

あたしは人殺しだ。

仕方がない。

こうするしかなかつた。

こうつが悪い。

やつぱりやせながら、あたしは後悔していた。

それは 衝動的に、とはいえ、こうつを殺してしまつたことじやなくて。

あの二つのこと。

『それ、ヴィトンでしょう』

『いいなー、いいなー』

友達の声は、あたしを有頂天にさせた。

藤本は気前よくお金をくれて、いろいろなものを買つてくれた。

週1のセックスと引き換えに。

どうつてことなかつた。

割のいいバイトだと思つていた。

あんなことをして、自由になつたつもりでいたあたしは

本当になんてバカだつたのだろう。

なんて軽はずみだつたんだる、。

あたしは、昔のあたしのせいでの取り返しのつかないことをしてしまつた……。

4 あたしの過去_1

いまから7年前。

高校生になつて。

あたしはさつそく「初めてのこと」「ひとつつ覚えた。

一つはアルバイト。

それは中学の時から決めていたことだった。

高校生になつたら絶対にアルバイトをしたい。

それゆえに、校則でバイトが禁止されていない学校を選んで受験したほどだ。

なぜつて あたしはお金を貯めたかった。

お金を貯めて、家を出たかった。

高校卒業と同時に、絶対に。

窮屈でしかたなかつた祖母のマンショն。

そのころ、あたしは祖母　といづよりババア　と、とある地方都市で一人暮らしだつた。

中1の終わりに、たつた一人のお母さんを事故で亡くして。

父は生まれた時からいなし、ひとりぼっちになつたあたしは、お葬式ではじめて会つた唯一の親戚である祖母に仕方なく引き取られたのだ。

この祖母が　戦前生まれの祖母は、とにかく口うるをくしてケチだつた。

あたしは生まれて初めて、門限といつものを言つて渡された。

中2で5時。

小学生かよ、とあたしは抗議したけど（こや、小学生だつて、今のコは塾で帰りが遅くなるはずだ）

「うちの方針だから。女の子は5時に帰つて家事の手伝いをするものです」

と祖母は絶対に譲らなかつた。

門限を皮切りに、制服のきこなし、見るテレビまで制限された。

私服も祖母がついてこないと買ってくれないから、好きな服はたい

てい却下。

それ以外にも、机の上の片づけ方から、箸のあげおりしき、あげく
「つづけおじこのの遺族年金でやつと暮らしてゐんだから、無駄
遣いするな」「

と夜更かし厳禁、お風呂の時間や水道の使い方まで難癖つけられて。

使つていたピッヂも

「中学生には必要ない！お金がもつたいない」

と取り上げられた。

なにもかもがんじがらめに縛りつけようとする祖母に納得できない
あたしは、当然反抗した。

毎日のように練り広げられる激しい口げんか。

「養つてやつてゐるのに文句言つな！ 嫌なら出でていけ」

祖母は玄関に向かつて指をわす。

一度は あたしはその通り出で行つて行った。

まだ、転校してきたばかりで、そんなに仲がよくなつたわけじゃな
い。

だけど、頼めば誰かクラスメートが泊めてくれる。

そう思った。

だが、玄関に向かつたあたしの背中に

「いいか、一度出て行つたら、一度と戻りつなんて思つなんよ」

鬼婆のよつな祖母の低い声。

英会話の友達、とやうりと電話で話している声とは2オクターブも違つよつな声。

「一度と敷居はまだがせないからね。出て行つてとつとと野たれ死ね」

足が止まつたあたしに、ババアは

「さあ、どうした。わつとと出て行かんのか」

と迫い討ちをかける。

悔しい。

まだ13歳、中2が社会に出れないことを、わかっていて。

祖母はあたしを徹底的に傷つけるのだ。

『野たれ死ね』

ところのは祖母の決め台詞なのだ。

涙がこぼれてくる。

泣かされるのはこつもあたし。

悔しいよ。

あたしだって、こんなといふ、出てこきたい。

出てこきたいよ。

でも、出て行つても行くといふなんか、ない。

こんな田舎の町に中の女の子が隠れるといふなんかないんだ。

東京に帰りたい。

東京に……お母さんといったふうに戻りたい。

あたしは布団をかぶつて泣いた。

5 あたしの過去_2

考えてみたら、生きていたい人が、お母さんを、せとせんじ祖母のいとを話さなかつた。

いつ誰に聞いたんだか忘れたけど、地元の短大を出るなり、逃げるよつにして家を出たといつお母さん。

びつて。お盆も、正月も、里帰りしなかつたわけだ。

そんなお母さんの気持ちが、よくわかつた。

自由だったあの頃。

お母さんはあたしを特別可愛がったわけじゃない。

あたしが覚えてこらるお母さんはとにかくいつも疲れていた。

たぶん、あたしを養うのに働くのでせいいっぱいだったんだと思う。
とはいって、べたべたに可愛がられてはいなかつたけれど、お母さんは
との仲は悪くはなかつた。

小さっこからあたしを自由にしてくれた。

もしかしたら教育、とかですか、気が回らなかつたのかもしれない。
とにかく小学校の頃から、門限もなく、あたしは好きなように遊んでいた。

友達のうちに泊まって、夜通しゲームをしたり。

夏休みは友達と渋谷のセンター街をアイス片手にひりついたり。

服装についてもお母さんは無頓着で、

「あなたの夏の洋服代はこれだけだから。これ以上は出せないから」とお金だけポンとくれた。

たいした額ではなかつたけど、自分でやりくりして好きな服を「一
ディナーするの」は、楽しかつた。

あたしは、自由なりに、ちゃんとわかつていた。

たつた一人のお母さんに心配をかけたらいけない、とこいじことを。

だから、遊ぶ」とは遊ぶけど。

警察につかまるよつなことは、絶対にしない。

終電までにま、つむか友達の「つむか」に必ず帰る。

そんな一定のラインを自分の中に決めていた。

家の手伝いも、必要だつたから、そのつむか友達のやつになつ
た。

洗濯機をまわしておいただけで、疲れて帰ってきたお母さんは

「わー、やつとこてくれたんだ。ありがと、つむかー」

と笑つてぎゅっと抱きしめてくれた。

その茶色い髪のあたりからは煙草の匂いがしたけれど、あまり嫌じ
やなかつた。

「ハンバーグで腹うつ飽きたので、簡単ながら料理もやった。

学校で畠つた通りにやつたつもつだつたのと、初めての田中焼もは少し焦げてしまった。

でもそんなのでも、

「食べれるから全然OK」

と喜んでくれた。

「最近は畠莉紗がいつもやつてくれるから、ホント助かる。…
…彼氏とかできた?」

上機嫌で聞いてくれるお母さんこ

「いなによ、そんなの」

と答えたら

「やーなんだ。だつたら、ずーっとウチにこいでね」

つて首をかしげてにじにじつとお母こ顔を出した。

「なにソレ。もしかしてずっとお母さんの料理つくれつて」と。

「うふふ。やうだよ~ん」

「だーれが」……。

親子といつより、友達同士みたいだつたお母さんとの暮らし。

そんな会話が、お母さんとの最後の会話になつてしまつた。

中1の2月だつた。

突然の、お母さんの死。

飲み会の帰りに、車にはねられてあつなく死んだ、お母さん。

酔つぱらつていたんだろうが、なぜか道のど真ん中を歩いていたら
しい。

遊び好きだつた、お母さんらしい死に方。

うちじろが悪かつただけの、寝ているみたいな、キレイな死に顔
だつた。

死んでいる実感がわからなかつた。

なんで、もつと氣をつけて歩かなかつたの。

お母さん。

なんで死んじゃったの。

あたし、もうやだ。

もう、こんな家、出ていきたい。

さもないと、あのクソババアを殺してしまって。

ホント、殺したい。

じゃないとあたしが死んでしまう。

いやだ。
いやだ。
いやだ。
いやだ。

派手な服をまとって夜遊びをしていた東京の頃より。

地味な格好をして規則正しい生活をしている今のまづが心は荒んでいた。

6 2つめの初めてー1

「 家の血をひく娘が。なさけない」

なんでも祖母の実家は『いいうち』らしい。

祖母はそういう言葉をよく使う。

あたしが高校を選んだ時も、そういうた。

祖母が望むランクよりずっと低い高校だったから。

がんばればもっと上の学校に行けないわけではなかつたけれど。
あたしにとつて重要なのは進学率、とかよりも、校則でアルバイト
が禁止されていない、ということ。

ただそれだけだった。

高校に入ったあたしは、社会勉強だから、と祖母をなんとか説き伏
せてアルバイトを始めた。

(これも大変で、納得させるまで毎日毎日、すつたもんがあつた)

でも、アルバイトに眞面目に通つあたしを、見なおしたのだろうか。

それともさすがの祖母も60をすぎて、パワーダウンしたんだろう

か。

あいかわらず、友人宅へ泊るなだのは、口ひりのさかつたし、門限もあいかわらずで

「嫁入り前の娘は暗くなつてから出歩くもんじやない」

などと時代遅れのことを言っていたが、バイトだからとこねばしぶしぶ許してくれた。

意外なのはあんなにケチなのに、アルバイトのお金は

「それはお前が稼いだお金だ。よく考えて自由に使いなさい」

といつてくれた。

あたしがバイトを始めたのは、国道沿いにあるファミレスだった。

時給は研修中は630円だったけれど、働いてお金をもらえるというのはとても新鮮な体験だった。

お金をもらえる、と思えば、

皿の3枚持ちも、

オーダー一つのマニュアルも、

百種類もあるメニューの略も、

教科書よりもずっと楽に覚えられる気がした。

祖母、といえば一度、アルバイト先に挨拶にきたことがある。

「ちゃんと、店の人に迷惑かけとらんやうね」

と声をかけられて、他のバイトの子の手前、あたしはとても恥ずかしかった。

店長も

「いちいち親御さんがあいさつに来たのは初めてだ」

と驚いていたほどだつたけれど、祖母にはあたしのまじめな勤務態度を終始褒めてくれた。

若いのに、きちんとしている。

遅刻欠勤が一度もない。

飲み込みが早くて頼もしい。

そんな言葉を聞いて、祖母はすっかりアルバイトを信用してくれたらしい。

あたしは、グッジョブ、店長と心中で親指を立てた。

そして1か月働いて。

初めて給料をもらつたとき、あたしは、何でもできる力を手にした
よつた気がした。

希望がはつきりと田の前に降りてきた気がした。

あの窮屈な祖母の家を、出ることができる可能性。

あたしは、ますますバイトにせいをだした。

週に4日ほど入れば、5万くらいになった。

そのうち2万ずつは貯金するんだ、と心に決めた。

3年後には一人暮らしを始める軍資金になるはずだったけれど。

そう簡単にはいかなかつた。

それと。

あたしはバイト先で、出会ひてしまつた。

あたしに、もう一つの「初めてのこと」を教えた、アイツ
キと。

7 2つめの初めてー2（前書き）

今回の話は、いつたん現在に戻っています。
ア莉紗はホテルで……。

「これから、じつじよハ。

そう考える前に。

あたしは、まずシャワーをあびたかった。

れつき、藤本に舐めまわされた……唾液がついたままの体を洗い流したい。

バスタブの中での、藤本との格闘のせいで、すでに体中びしょびしょ濡れていただけれど。

藤本に汚された汚点は、粘りついているように思えたのだ。

「のとわ、すでに」。

自首する、といつ考えはまるで浮かばなかつた……。

人を殺した、といつことなはわかっている。

だけど、それは直接的な罪悪感に結び付かなかつた。

まるで、心のどこかで、当然と考えていたように。

だからといって。

逃げよう、とか。

この遺体を隠さなくては。

などといつ具体的なことが浮かんだわけでもない。

とにかく、体を洗い清めたかった。

ガラス張りのシャワーブースは、ジャグジーの横にある。

なぜか一段高くなっているシャワーブースの中からは、バスタブの中の藤本がよく見えて。

あたしは、いったんシャワーブースを出ると、洗面台からバスタオルをもつてきた。

そしてもう一度バスタブの横に立つ。

全裸の だらしなく眠っているような 死体。

それが気味悪くて。

あたしはバスタオルを広げると、遺体の上にかけた。

大きなバスタオルだけど、ひざ下がはみ出る。

もう少し。もう少し引っ張れる。

あたしは手をのばして、少しでも遺体の~~あく~~べの面積を隠そうとした。

そのと~~あ~~。

……あ。

体の中から、液体が逆流するのがわかつた。

藤本が残した、液体。

『同棲してゐなら、ピル飲んでるんだろ』

そういうて、強引に体内にぶちまけたもの。

いやだ。

気持ち悪い。

あたしは、あわててシャワーブースに駆け込むと、コックをひねつた。

激しい雨のよつこ、あたしを包むシャワー。

温かい雨。

そして思い出す。

はじめての男。

生ぬるい雨の中のキス。

この体内から逆流する感覚も。

あたしに、せんぶ教えた……ヒロキ。

『「めん、『めん』』

無責任なヒロキ。

つけないほうが気持ちいいから、外で絶対に出すからと、いつて。

『それ』に失敗すると笑って、キスしてしまいました。

そうすると、たいしたことではないように思えた。

バカだった、あたし。

涼は、といえば。

絶対に避妊してくれた。

責任を取りたくないから、とかじゃない。

あたしのことと、一人の未来を真剣に考えてくれたから。

あたしは思う。

はじめての男が、本当に好きな相手で。

お互いに大事に思えるような……。そう、涼のような人なら。

ううん。

涼と出会い今まで「はじめて」を取つておけば。

こんなことにはならなかつた。さつと……。

8 センチツセ、図_1(縦書き)

今回から、畠利紗の「せじあと」についての題に出が伸び語ります。

あれは、バイクにも慣れはじめた梅雨のはじめ、だったと思つ。 もうひとつは、雨で止まってしまった、ヒロキに関する記憶。

「うーー。40%のくせになんで降るかな」

あがる30分前から急に降りだした雨。

ガラス張りの窓からは雨に濡れた路面がてかつていて、あたしはがつぶつと肩を落とした。

ビビつでお姉さんがないわけだ。

傘はスタッフルームの置き傘を借りればいいけど。

あいにくあたしはチャリだった。

高校から直接ここへ来るのはチャリが一番便利だったから。

店内に流れる音楽に負けじと響く雨音から、雨は結構強く降つていて、

傘差してチャリここだら、たぶんびしょぬれになつてしまつだらう。

そこまでして、窮屈な祖母の家に、わざわざ早く帰るよつも。

雨を口実にして、遅く帰ったほうがいい、とあたしは判断した。

店から歩いて5分のバス停から9時50分のバスがある。

帰りが10時をすぎるので、もちろん祖母はいい顔をしなかつたが、その時間しかバスがないのだから仕方がない。

それにバイト先のファミレスには同じくらいの年の高校生やフリーターが結構働いていて。

同じ時間であがる口や、休憩に入った口たちとしゃべってれば、楽しい時間はすぐに経つだらう。

「お疲れさまでーす」

「アリサちゃん、あがり?」

裏への扉の隣にあるアイスクリームのコーナーにいた雪菜さんが声をかけてきた。

パフェをつくりてこりしこ。

ちなみにこのレストランで一番年下のあたしは、1か月もするとみんなに「アリサちゃん」と呼ばれるようになっていた。

あたしのことを『大友さん』と苗字で呼ぶのは店長と料理長くらいだった。

「はい。あれ、雪菜さん、9時から一番じゃなかつたつすか?」

一番、ところのは休憩の店内用語だ。

「ああ、これ。これはあたしの『従食』」

ハスキーな声でやう答えると、雪菜さんは一いつと笑つた。

このフアミレスは、値段の40%を払えば（給料から引かれる）何を食べてもこことになつている。

スイーツに田がない雪菜さんは『従食』として自分が食べるチヨウナツツサンティーをつくりこむのだ。

お密に出すもの以上に、わざわざ力をこめてトイツシャーにアイスを詰め込んでこる。

お金がもつたないので、あんまり従食を利用することのないあたしだつたが、雪菜さんの『従食』を見ると急激に甘いものが欲しくなつてきた。

「あたしも食べて帰るつかなあ。いいな、チヨウナツツサンティー」

「じゃ、あたしがついでに作つたげるよ

「いいんですかあ?」

「まかしどき。スペシャルバージョンやけん」

雪菜さんは黒いアイラインで縁取つた田でいたずらっぽく笑つた。

しばらくして雪菜さんがスタッフルームに持ってきたチョコナッツサンデーは、一見ちょっと多めに生クリームがかかっているだけだつたが、

「実は、アイスは全部16番じゃなくて18番つかってるんだ。それとこのアイス、バーラじやなくてティラミスだし。こっちのほうが、ゼットエウめえし」

と雪菜さんは得意げにそれやいた。

ちなみに16番とか18番とここののはトイシシャーの大きさで、当然18番のほうが大きい。

「本当だ。すげウマい」

「だるー」

アップにした明るい色の髪といい、濃い化粧といい、どうみても筋金入りのヤンキーな雪菜さんだが、とても親切だった。

雪菜さん以外の店の人も、キッチンのおじさんたちまでだいたい親切で、スタッフはみんな仲良しだった。

ひつひつて裏でパフュームをぱくつしていると、

「アリサちゃん、あがり？」

「そんな極甘、よく飽きないねー」

裏のスタッフルームは倉庫の隣にあるから、何かをとつとめたスタッフがよく声をかけてくる。

「また18番サンターかー？ 店長がいないとおひやへひややるな」

ヒロキ そのときはまだ山上さんと呼んでいたんだけど ものんな感じで笑いながら声をかけてきた。

彼はあたしや雪菜さんとおなじホール担当だ。

「ひつひつーじゃん。コースターなしだしさ」

従食用なので、飾りのコースターや受け皿をつけてない分、アイスを増やしたと雪菜さんはめちゃくちゃな言い訳をした。

ひとくち、と雪菜さんに向かって口を開けたところを見ると、まあ、山上さんもとがめるつもつはないみたいだ。

「やだよー」

「口止め料、口止め料」

とつとつ雪菜さんは「しょーがねーなー」と、やれこれやれついでにハニース部分をすくって差し出した。

それをパクつと「まめ」でキャッチした山上さんを……あたしは、何かいけないものを見たような気がして仕方がなかつた。

雪菜さんは、とこえは、山上さんの口の中に入つたスプーンを、まるで気にする」となく平氣で自分の口に運んでくる。

ちなみに雪菜さんは、同棲している彼氏が、わやんとこる。

つまり、彼氏でもない、単なるバイト仲間と間接キス。

でも、そんなことを気にする自分が、逆に一番こやらじょつな気もして。

いたたまれなくなつたあたしは、山上さんは優しい声をかけてきた。

「あれ？ アリサちゃんはあがりじやないの？」

「……バス待ちです」

「あー、急に雨降ってきたからね。何時のバス？」

「50分です」

いちおう敬語を使うのは、山上さんが4学年上の大学2年生だからだ。

山上さんと話しかけられたとき、あたしはいつも微妙に緊張している。

だつて、あたしの人生で、4歳年上の人と話す機会などなかつたから。

あたしはそんなんふつに自分に言い訳していた。

でも、キッチンのおじさんたちとはそんなんに緊張などしないのだけど。

「ふーん。……10時まで待てるなら送り合つてあげるよ」

「何、ヒロキ、今日わざわざ新車乗つてきたんだ」

ヤンキーの雪菜さんにかかれば、年上でもヒロキと呼び捨てだ。

「そだよ。なにに降りやつてムカツクナビ」

ムカツク、とここつこよむわせ嬉しそうだつた。

そつこくれば、自宅から大学に通つてゐる山上さんは、バイク代を新車の頭金にするために貯めてゐるつてこつてたつけ。

「バスだと××線まわりでしょ。車のほうが早いよ。ね」

山上さんはあたしの顔をのぞきこんだ。

「はあ」

「こつじやん。送つてもいいぜ。バス代得する」

雪菜さんもやううつて、なしくまじてあたしは送つてもいいけれど

になってしまった。

「バイト、慣れた？　たちつぱできつくない？」

「ハイ、大丈夫です」

やつぱ緊張する。

だつて。男の人と車で一人きり、なんて初めてだから。

そもそも母子家庭だつたあたしにとつて、知り合いに車に乗せても
らうひとと自体がとても珍しい。

小学校の頃に、友達と一緒にイチゴ狩りに連れて行つてもらつたく
らいかもしれない。

あの頃に比べて、大きくなつたあたし。

しかも、後部座席だつた子供のこゝと違つて、助手席だ。

助手席つて。

すゞく、大人な感じがする。

大人の、一人前の女性の……女扱いされてしかるべき席。

あたしが座つてもいいんだろ？が、そんなためらうさえあって。

それに。

あたしの制服の短くしたスカートは。

助手席のシートにちゃんと座ると、太ももがかなり丸見えになる。

学校のバッグを後ろに置いたことをあたしは後悔した。

たえず気になるスカートの裾も。

フロントガラス越しの街灯だけの、暗さも。

胸を斜めに締め付けるようなシートベルトも。

ガソリンなのか、ビールなのか、苦い匂いがする湿った空気も。

なにもかも慣れない車の中は、とても窮屈に感じた。

雨はあいかわらずひどくて。

ワイパーは休むことなく左右に動いていて、そのそばから雨が夜の景色をぼやかしてしまつ。

そんなふつに外の景色がかすむと、あたしはますます、この車の中が息苦しくなる。

逃げられない密室に……。一人きり。

「××女子高だよね」

「はい」

あたしの緊張を知ってるのか知らないのか、山上さんはハンドルをとつたまま何気ない話をふつてくる。

そんな風に車を運転する山上さんの横顔は、とてつもなく大人に見える。

「俺のサークルの後輩に××女子高出身の子がいる。……っていうんだけど知ってる?」

あたしは首を振った。

高一のあたしが、卒業生を知るはずがない。

「そつか。知ってるわけないよね

車の中は、それっきり沈黙した。

信号で止まっている車内には、ワイパーの音だけがひびいて。

あたしは、あせる。

でも、どうしていいかわからないので黙つていいしかない。

「アリサちゃんが、ヒロキに狙われてるよね」

わつわ。

山上ちゃんがいつてしまつたあとで、雪菜ちゃんは「んな」とをいつた。

「わつですかー？」

あたしは、ひとつ気付いてないふりをしたけど。

「アリサちゃんにほつか優しくするじやん」

雪菜ちゃんのこつとおり、山上ちゃんはあたしに優しかつた。

彼は私が入店した時から、

『新しく入つたひと? エフ、高一? おとなっぽいね』

と親しげに声をかけてきて、何かと親切にしてくれた。

バイト先にはあたしのほかにも高校生や短大生の女の子が働いていたけれど、彼は最初から目に見えてあたしに親切だったと思つ。

団体さんのオーダーが入つたらさりげなくヘルプしてくれたり、忙しくてバッシング（片付け）の手がまわらないときなんかは、さつと片づけてくれたり。

「まだ新人だから、危なつかしいんじゃないスか」

と理由をつけつつも、あたしも、とっくにわかつている。

『高校どこ?』

『中学は?』

『なんでバイト始めたの?』

暇なときは、どうでもいい」と何かとよく話しかけてきたし。

たぶん『狙われている』のはわかる。

でも、だからといって。

意識するだけで、どうふるまえばいいか、わからなくて。

彼に話しかけられたたびに、あたしはなんとなく緊張していた。

こないだまで中学生だったあたしから見れば、19歳の男の人はすごく大人で。

「ヒロキ、年下好みだもん。前の彼女も年下だつたし」

「モーなんだ」

前の彼女、という単語に、あたしはひつかかりを感じる。

どんな口だつたんだろ？

それは最近のことなのかな。

湧いてくる興味を『関係ない』と胸の奥に押し付けながら、あたしは雪菜さんが前の彼女について、もっと詳しく話すのを待った。

だけど、

「『せつてー粗われてるつて』

雪菜さんはそれしか言わなかつた。

あたしから聞いて、山上さんに興味があるように思われるのもイヤだつたから、それきりになる。

「アーッ、見た目によらずやつちんだから氣をつけーね

とだけ言つて、雪菜さんは1番を終わつて仕事に戻つてしまつた。

「 」の車で。

何回かの信号停車で。

「 女の子乗せるの、アコサカちゃんが初めてだよ

ふこひ、山上ちゃん柔らかく口調で話しあじめた。

あたしはハッと顔をあげた。

優しい田でみつめられていた。

心臓が、暴れだす。

シートを通じて、山上さんとわざわざつてしまつのではないかとこつま
ど、激しく。

「えー……。ウソばつか」

あせるあたしは、なぜかそんな答えをしてしまつた。

「え、なんで」

外の白い街灯に、半分だけ照らし出された山上さんの顔は思つたよ
り真剣で。

雪菜をひとつの時のよつて、冗談で受け流してほしかった部分。

あたしはどうしてこいかわからなくなつてしまつた。

あんなことをいつてしまつた理由。それは。

「やりちゃん」

という単語がずっと気になつていた。

それは彼にはとても似合わない単語だった。

だって。

山上さんのルックスは、『イケメン』と『よりはどっちか』といふと『いい人』な感じだった。

スラッシュとして背がまざまざ高いスタイルはイケてるけど、顔だちは地味だった。

笑うと目が糸になる。

そんな、キッチンのパートのおばちゃんにもかわいがられている彼が『やりちゃん』とは、どうみても信じられない。

そこがあたしの認識不足だつたんだけど。

あたしのなかでは『やりちゃん』な人=イケメン=派手なルックス、という構図があつたのだ。

人の良さをうな、おばちゃん受けもいいヒロキが『やりちゃん』とは

ゞいつても信じられない反面。

大学生、といつ今まで出会ったことのない人種が、どんな暮らしをしているのかも、またあたしには想像のつかない世界だった。

どつ処理していいかわからない沈黙。

信号が青に変わって、といつあえずエンジンが動き始める。

「まーた、雪菜がよけいなことを吹き込んだんだろ、まったく」

ハンドルをとりながら、山上さんはやつと明るい声を出してくれた。

「あー、面白半分にウソばっかり言つもんなー」

しょーもない、といつよつな口ぶりに続けて。

「この車は」

とあらためた口調で振り返る。

「先週納車したばかりだから。本当に亜莉紗ちゃんが初めてだよ」

あたしは、また、なんて答えたらいかわからなくなってしまった。

「 」の車は、先週納車したばかりだから。本当に田中紗ちゃんが初めてだよ

その言葉がどんな意図を持つのか、何をあたしに伝えたいのかわからなすぎて。

あたしは马上に何て答えたらいいかわからなくて、本当に困った。

『 あいつがどういれますか』

とこつべきなのか。それとも

『 嬉しい』

とほしゃべべきなのか。

わからない。

仕方なく

「 先週、置つたばっかりなんですか？」

と訊き返す。

「や。ずっと自分の車が欲しくてさあ。それで頭金貯めてたんだ」
そういえば。

車のためにバイトしてる、つてのは前に誰かと話してたのを聞いた
気がする。

スタッフルームで車情報誌とかカタログを広げて男同士話がはずんでたところも、たしかに見たことがある。

なんでも、自宅から大学までバスを使うと1時間もかかるつえにあまり本数もなくて、不便だつたらしい。

車ならたつた30分で通学できる。

今までおお父さんのおセドリックやお母さんの軽を使わない時に借りてたけど、これからは自分の車で通学できるのが何よりうれしい、と山上さんはハンドルをとつたまま説明を続けた。

それで、あたしは山上さんのいってる大学がだいたいわかった。

おそらく郊外にあるあまりレベルが高くない私大だろう。

ファミレスなんかでバイトしている時点で、たぶん国立大のほうではないな、とは思っていた。

なぜなら国立大学なら、フツーは家庭教師や塾講師などの、もうち

あたしがそんなことを奢えてくるとは知りず、ヨウさんせいの車を選んだ理由なんかを、前を見たまま、しゃべつてくる。

思い切つて新車を買つたのがとても血腫りじこ。

その嬉しさは、はずんだ声からも十分にわかる。

「じりりで、すいこキレイですよね。あひこひピカピカ」

車にはまったく詳しくないので、気の利いたほめ言葉が浮かばないあたしが、とりあえず「新品のキレイをほめるしかない。

「だるー？ あんまりキレイだから最初、車内土足禁止にするか迷つたんだ。でもいかにもセコイからやめたんだけど」

そうにわれて、あたしが、足もとをみた。

雨だったから、あたしの靴からついた水分で新品のマッドがびしょびしょになつている。

あたしとヨウさんが店から出たとき、雨は最高に激しかったのだ。

「……すこません」

反射的に謝つたあたしが、ヨウさんはなんのことだかわからなかつたらしこ。

「ん？」

と振り返った。

「床、びしゃびしゃにしちゃいました

「うこうこう、「ああ」とつなづいた。

「こうこう。もうこので話を使わせたくないから十回OKしたんだし」

山上わんば田を糸にしながら、またく氣にしてない風に、話を続ける。

「大学のダチにや。やつぱり新車買つたやつがいるんだけど、買つて半年経つの、シートにベールはりっぱなしなの」

「ベール？」

「やう。汚れるのが嫌なんだつて。ベールがやぶけるまでどりあえずつけとく、つていうんだけど、半年経つてもまだついてんだぜ。おかしくない？」

「くえー」

と返事をしながら、あたしは話ではなく頭の上に話を取り合っていた。

わざわざから氣になつてこるそれは、山上わんの声。

ホールの中での

「こりひしゃこませ」

「かしこまりました」

「じゅつくじどうぞ」

とこう営業用の、柔らかく明るさがある声より一段低くて。

くだけた口調に、車の中で聞くせじなのか、男っぽく響く。

男の人の声って。

こんなに胸に響くよくな声だったつけ……。

山上さんの意外な魅力に、再び氣になることが浮上してきた。

「やつせん」疑惑。

「の声で、甘こじとを囁かれたら。

案外、彼は女の子の前では、変身するのかもしれない。

そんなこともあらえるかも。

彼の可能性があがるにつれて、汚してしまったマットも、氣になりだす。

「女の子乗せるの、アリサちゃんが初めて」

そういうわけ、あたしでよかつたんだろうか。

それとも あたしをわざわざ選んだんだろ？

焦れるつま先。

革のローファーからしみ込んだ歯は、靴下にまで染み込んでじつと
りと冷たい。

靴を動かすと、ゴムのマジットの上で、泥がざらついた。

「いいって」とこっててくれたけど、なんだか申し訳ない。

それとも、ヨコをひととつして、マジットやペーパーホールのよつ。

「初めて乗せる女の子」も、どうでもこことなんだろ？

わざとより動悸が落ち着くとともに、元気になつてこる。

「とにかくで」

「あたしなんかで」

「とにかくで」

声を出したのは一人同時だった。

「あ……」

田が合ひ。

恥ずかしい。

ひつじんでしまつたセツツのかわりに、顔に血がのぼつてくる。

再び田が糸になつた山上さんをあたしは見続けられず、視線は自分の太ももに墜落した。

「いいよ」

山上さんは譲つてくれるそぶりをしたけど。

顔が熱い。

話せるわけない。

『あたしなんかで、よかつたの?』

なんて……。

あたしは下をむいたまま首をぶんぶん振つて、

「いや、いいです」

とかわうじて答えた。

「せっかくだから、少し、ドライブある?」

空音よ。

小さく響くラジオの音よ。

二上あさの森りかこ声が、あたつを叫んでしまった。

1.1 「初めて」の重み

「せっかくだから、少し、ドライブする?」

あたしは反射的に首を横に振ってしまい……口上さんの顔を見て後悔した。

こんな、がっかりしたような顔、はじめて見たかもしない。

即座に断つたから、傷つけてしまったのかもしない。

「や、祖母がいるせいんです……。すいません」

あたしは、なんとかフォローをいれる。

「ふーん」

だけど、言い訳に聞こえてるかもしれない、とあたしはから言葉を重ねる。

「本当に厳しいんです。高校生になつても門限6時とかだし」

「6時イー！」

やつと口上さんは本気で驚いてくれた。

「バイトのときなんか、軽く超えるじゃん」

「はい」

「はい。バイトは特別に許してもいいんです」

「……あ、なんかウソくせこかも。」

でも本当の話だから仕方ない。

バイトじゃなこときに門限を破ると、罰として1回につき100円を1000円ずつ引かれる。

ちなみに、じづかには洋服代は別として500円。

バイトをしてくるとはいって、ただでさえ少ないじづかいが1回100円ずつ減るのは、本当に死活問題だ。

必死でそんなことを説明するあたしは。

「上さんにはどういきたいんだらうか。」

「上さんに嫌われたくないんだらうか。」

心の中で自問自答を繰りかえしていく。

「……そつか、大変だね」

上さんは、あいかわらず落ち着いた柔らかい声で答えてくる。

「じゃあ、今日ままで帰らなことね」

「……スマセン」

それっきり、車の中は沈黙して……雨音が再び冷たく暗がりを支配しました。

「ええー。なんで、そのままドライブしなかったの～」

ハルナが高い声をあげたのであたしはシーと左手の指をたてた。

学校の昼休み。

いつものようにハルナとお弁当を広げている。

昨夜の雨と打って変わって、初夏の太陽がまぶしい今日。

教室の窓を開け放つても少し暑いくらいだった。

「じつがい一千円をくらこ向こ。『捨てる』チャンスだつたのに」

「声が大きいよ」

あたしはあたりを見渡した。

女子高の昼休みの教室は騒がしくて。

そのおかげか、何気ない、だけど、きわどい意味を聞き取った人はいないみたいだった。

「あ～あ。もつたいたーいいー」

少し声を落してハルナは、あたしのお弁当から卵焼きをすばやく奪い取った。

あたしは昨日のおかずに卵焼きを加えただけのお弁当をいつも持つてきている。

女子高であるうかの学校には学食がない。

パンなどを買えばそれはこづかいから出ていくことになるから、あたしは毎朝せつせつお弁当をつくることになった。

あたしの卵焼きは、祖母に厳しく仕込まれたせいか、ハルナにとっても好評で。

油断しているといつもとられてしまつ。

「アリサはいいお嫁さんになれるね。いつそ処女も未来の田那さんのためにとつとけば」

あーおいしい、といいながら時折そんな冗談をいう。

当時のあたしは、とんでもない、と思っていた。

ハルナは、高校に入つてできた友達だった。

中学時代、あたしは途中から転校してきたせいか、あんまり親しい友達はできなかつた。

それに、転校してきて1週間くらいで、怖いセンパイに呼び出しつらつて。

派手なグループと遊びまわつていた東京時代の二オイを嗅ぎつけられたのかもしれない。

幸い、センパイにはちよつと注意されたくらいで済んだんだけど、それがうわさになつて怖がられていたらしい。

言葉づかいも、気取つてるとか陰口をたたかれているのもわかつていた。

門限が厳しそうのも、あまり溶け込めなかつた原因の一つだと思つ。

だから、高校では友達をつくりたい、と思つていた

そんな入学

式の口。

靴箱にいたあたしに、小柄で愛嬌のある口が近寄ってきた。

「1組の大友亜莉紗さん？」

その口はこきなり話しかけてきた。

なんでフルネームを？

と、びっくりしなづくと

「あたしも1組。小田春菜つていいます。よろしく～」

とあたしの靴箱の隣に手を伸ばしてきた。

それで理解した。

張り出されたクラス発表で、出席番号が前後だつたから、名前を覚えていたらしい。

それがきっかけで、春菜とはすぐに仲良くなつた。

中学時代のことがあつたから、女ばかりの女子高で、つまくやつていけるか少し心配だつたけど。

社交的な春菜とつるんでいたおかげで、高校ではみんなと普通に仲良くなることができたのだ。

女ばかり40人もいるクラスにはそれこそいろいろなタイプの口

がいた。

少数民族もいたけれど、だいたいはギャルっぽい遊んでる感じの口か、オタク、スポーツ系の3つのタイプに大きくわかるみたいだつた。

アニメもみないし、部活もやらないあたしは、ギャルグループの口と固まることが多いつた。

そこで、あたしは知る。

仲良くなつた友達のうち、半分以上がすでに処女ではないことを。

中2のはじめ。東京から転校してきたとき。

祖母が口うるさかったとはいっても、あたしはこの地方都市の口たちより進んでいたと思つ。

ファッショնも、持つてゐる小物も、そして男の子との関係も。

お母さんには照れくさくて言わなかつたけれど、東京にいたころ、彼氏といえる男の子はいた。

同じ学年で、遊び友達だった彼とは、キスまでだつた。

早熟な彼はもつと先まで進みたがつたけれど、あたしは許さなかつた。

遅生まれのあたしは中1当時まだ12歳で、さすがに早すぎる、と自制していたのだ。

倫理的な理由だけでなく、実際やせつぽちだったあたしの体は胸もまだぺったんこで、そんなことをできるとも思わなかつたのだ。

ひとつそりと交わす柔らかい唇の感触だけでも、十分大人な気がした。

だけど。

こっちに来てから、わずか2年のあいだに、まわりはあたしを追い越して行つたらしい。

あの厳しい祖母の元で暮らしていたら、彼氏なんてできるはずがない。

ほとんど家と学校を往復するだけだった中学時代。

ハルナと特に仲良くなつたのは……彼女も同じだつたから、というのもある。

ヤンキーが多い地元公立中を避けて、私立の女子中にいつてたというハルナは、本人こそ言わないけれど、結構いいうちのお嬢様だと思う。

女子中だから彼氏もつくれなくて『暗い青春だつた』とぼやくハルナは、あたしと同じく処女だ。

『エスカレーターの女子高になんかぜつたいに行かない……と思つて、わざわざ共学の公立高校を受験したのに、落つてしまひやつた』と明るく打ち明けた。

おしゃれで可愛いし、性格も悪くないからすぐに彼氏くらこできれうなのに、男の子の前に出ると構えてしまひやつて。

『これも女子中の後遺症だよ。きょうだいも妹だけだし

と頭を抱えるが、男つけのない中学後半をすごしたあたしもいつのまにか、後遺症になつているんだろうか。

東京にいたころは、もつと男子とも気軽に話せたのに、その時代からみると、昨日のあたしはあきらかに緊張しそうだ。

「今度誘われたときは、絶対にいきなよ」

ハルナは念を押すと、ジュースのストローを吸つた。

「バイトで彼と一緒になる日は新しいパンツはいいかな？」「やけりや

ときわざこ」とまでいうから可笑しい。

経験もないくせにハルナはときどき突つ走つたことをこいつのだ。

「てゆかー。あっちもそつこつもりか、まだわかんないし。……それに、正直なところ、あたしも山上さんのこと好きかどうかわかんないし」

「なにその消極的な考え方。しり込みしてたら、いつまで経つても処女の人まだよ」

説教するやり手ババアみたいな口調になつてゐるハルナがおかしくてあたしはつい笑つてしまつた。

「そこ、笑つといのじやないし」

ハルナは顔を一瞬とがらせたあと、声をひそめて

「付き合つてみたら、それから好きになるかもしねないじゃん。…
… じゃあ、やつたらどうだつたか、教えてね」

ヒロセヤベーとは言れない。

そうだ。

まだのあたしたちは、参考にするべきリアルな経験談に飢えていた。
すでに処女ではない「たちは、むしろえつちな」と云つてあまつ
具体的にはしゃべりない。

処女の「のほう」が積極的にえつちについての詳細を聞いたがるが、
それについて

「それは……ねえ？」

「だよね」

と非処女どうし田配せをして「まかす。そして

「じつみればわかるから」

「やつも。すればわかる」

と言つてほほ笑む。

そんな様子は、すぐ大人に見えて。

なんだか焦つた。

放課後。

あたしは、ハルナとわかれバス停にいた。

今日はバイトではないけれど、昨日の雨のせいでバイト先に自転車を置いて帰ってしまった。

自転車がないと明日困るだろうから、あたしは今日のうちに取りに行こうと思つたのだ。

本数が少ないので、あたしはぼんやりバスを待つていた。

と、横を自転車が2台、並んで通り過ぎた。

同じブレザーを着た、あたしと同じ年くらいの男の子と女の子。

近くにある共学の「たちだりつか。

自転車を並べて笑いながらしゃべりあつてゐる。

たぶん、カップル。

いいな。

あたしは、バスを待つふりをして彼らの背中を見送っていた。

あたしの頭の中にある、理想の付き合い。

同じ高校生で。

自転車を並べて帰る放課後。

少しづつわかりあうのと比例して、自然に少しづつ進んでいく関係。
早く処女を捨てたいと思いつつ、そんな爽やかな関係にもあこがれていた。

それに比べると、大学生で車にまで乗ってる山上さんは、恋の相手としては少し大人すぎる気がした。

山上さんは、あたしの知らないことをいっぱい知っている……女の人のことも、きっと。

そう考えると、少し怖くて。

ハルナに話した通り、あたしは山上さんのことが好きなのか、自分でよくわからなかつた。

あんないドキドキしたくせに、だ。

『狙われている』という事実に心が過剰反応したのかも、と冷静に考えたりもするくせに、昨日の夜のことを考えると甘酸っぱいもので胸のあたりがきゅんとする。

もちろん。

彼氏はほしい。

できれば、早く経験もしたい。

そんな焦りはあつた。たぶん人一倍強く。

なぜなら、ババア祖母はあたしによく言つ。

『嫁入り前の娘が外泊なんて。とんでもない』

「嫁入り前」と祖母が言つのは、たぶん「処女」という意味。

祖母はあたしが処女だと信じている。

それをこいつそり捨てて大人になることは……祖母の呪縛から解放されることもあるように思えたのだ。

『付き合つてみたら、それから好きになるかもしれないじゃん』

ハルナの声が蘇る。

付き合つてみるのもテだろつとは思ひ。

実際、あたしは好きがどつかもわからぬナビ……山上さんが決して嫌いではない。

目が細くて、笑うとスヌーピーみたいな印象になる山上さんをいい人だとは思ひ。

他の「せあ」へギドキドキしたし。

誰でもいい。

あたしを祖母から解放してくれるなら。

できれば、そのまま連れて逃げてほし、とせん思つあたしの頭の中には、夜の駅の情景が広がつていた。

どこのかのドラマで見たのだろうか。

手と手をとりあつて、逃げる一人。

ロマンチックな想像に入り込んだあたしは、近づいてくるバスの姿に我に帰る。

山上さんは。

これから、人生のすべてを賭けるほどの人になるんだろうか。

あたしは、バスの車窓から見える、金色に輝く午後の街に彼の面影を描こうと努力した。

彼が好きなのか。

それとも……。

いずれにしても、次の誘いを、あたしがひそかに待っていたのも事実だった。

だけど。

梅雨が本格化したのに。

山上さんは、あれ以来、

「送つていこうか

といつてくれなかつた。

あれから。

梅雨が本格化し、何度も雨の日はあったのに。

山上さんは「送つて行こつか」とこつてくれなかつた。

辞めた人のかわりに、山上さんが深夜のシフトに入るよつになつたから、といつ物理的な理由もある。

だけど、あたしと入れ替わりで出勤する山上さんは、

「お疲れ様です」

と挨拶はしてくれるもの、前みたいにこりこり話しかけてこない。

あたし、嫌われちやつたのかな。

好きかどうかわからない、なんて言つたくせに、いつも通り落ち込んだ。

何か嫌われるよつなことをしただらうか。あの雨の夜。

気がつくと、いつもそのことばかり考えている。

「自分から話しかけてみればいいじゃん」

人のことだから、ハルナはいとも簡単にそういうけれど。

いざ、話しかけようとすると、なんて声をかければいいのか、まるつきつわからなくなってしまつのだ。

そのうち。

山上さんはバイトにも顔を出さなくなつてしまつた。

シフト表から名前が消されていなごとにりをみると、辞めたわけではなさそうだけど。

なぜか来なくなつてしまつた。

どうしたのかな。

ケガでもしたのかな。

まさか、交通事故？

いや、でもそんな大きな出来事だつたら、バイト先でもうわざになるはず。

だけど、誰も何もいわないから、たいした理由ではないのだらう。

雪菜さんや他の人に聞けばわかるかも、とも思つたけど、変に誤解をされそつで聞けない。

「彼ばかりが男じゃないんだし。元気だしなよ」

ハルナに誘われて、あたしは合コンなるものに顔を出してみた。

相手は男子校の2年生だ。

6月はじめに、その学校の文化祭に行つたハルナがセッティングしたのだ。

みんな親切で、場を盛り上げよつとする明るい人ばかりだつたけど……なんかギラついている気がした。

考えすぎなのかもしれないけど。

気をつかう優しさの下にも。

面白いジョークの下にも。

すべて　彼女がほしい、あわよくばセックスがしたい、という下心がみえ隠れしている気がしてならなかつた。

まあ、あたしたちのほうも同じなんだけど。

なんか、サカリがついた犬のお見合いみたいにケモノじみてる、と思つた。

その中の一人にあたしは氣に入られてしまつたらしい。

しつこく聞かれたので、メールアドレスを教えてしまつたら、毎日のようにメールがきてうんざりした。

それに比べたら。

『狙われていた』はずの山上さんはずつと大人だったように思えた。

考えてみたら、『狙われていた』にしては、あたしは彼にメールもケータイの番号も教えていない。

それを教えるチャンス　山上さんの側からはさりげなく聞くチャンスは山ほどあつたのに、だ。

それは、大人の余裕なんだろつか。

それとも、単にあたしに興味がないだけ？

気がつくと、山上さんの顔を、もう1週間以上見ていなくて。

だけど、バイトにいけば、いやでも山上さんのことを思い出してしまつ。

やつぱり好きなのかな。

好きだから不安なのか。

気になつてゐるだけなのか。

いずれにしてもやり場のない気持ちを抱えたまま
た。

夏休みに入つ

夏休み入りしたといつて、なかなか梅雨は明けなかつた。

朝のうちは晴れて暑いのに、毎日のように激しいタ立が来る。

今田も、午後になつたとたん、いまにも雨が落ちてきやうに空はか
き曇ってきた。

あと15分であがりなのに、また雨かな。

そんなことを思いながらバッシング（片付け）するあたしに後ろから

「アリサ～」

と呼ぶ声がした。

振り返るとクラスメートのハルナがいた。入口のところで手を振つ
ている。

「あ～、来てくれたんだあ！」

あたしはメニューを持ってかけよつた。

夏休みに入つて。

あたしは毎日のようにバイトこいつでいることになつていて。

実際かなり入つていたのだが、バイトじゃない日も祖母にはバイトといつて街をぶらついたり、早めにあがつて夜まで遊んだりしていた。

バイトに対する祖母の信頼があればこそできる技だ。

4時であがる今日は、ハルナと買物の約束をしていた。

バイトで稼いだお金で自分の好きな服を買うのは自由だったから、

(「だらしない」とか「安っぽい」とか必ず一言せ言われたけれど、もつ慣れていたので無視すればOKだった)

夏休みに入ったあたしはおしゃれに燃えていた。

お金を貯めるとこつ最初の目的も「おしゃれをしたい」とこつ気持ちの後ろではかすんでしまつていた。

店長のかわりにホール全体を監督しているパートのおばさんがいるのでいちおうお客にするよつて、メニューを持って席に案内する。

ハルナが席につくと入れ替わりで隣の客が立ったので、素早くレジに立つ。

会計を済ませると、お冷を持ってハルナのところへ行く。

「雨大丈夫だった？」

声をかけながら隣のテーブルの片づけをする。

「降りそうだけど、まだ降ってなかつたよ。今日は4時あがりなんでしょう？」

「わかりやう。あとちょっと」と

そんな言葉を交わしながら、隣のテーブルをセッティングしてしまう。

「なにがお勧め？」

ハルナはメニューを開いて呼び止めてきた。

「わっあがるよ。」

「いいよ。なんか甘いものが食べたい。食べながら待ってるし。アリサはどうが好き？」

「ん~、こおり、うの山のおすすめはマンゴーフラッペなんだけど」

そこまで言つてあたしま、声を落してハルナにしゃべる。

「でも、チヨコナッシサンターのティラミスバー、ジヨンもつまこよ。本物はバーでつくるといいをトイラミスでつくる裏メニュー。…」
…」ソリ作つちやるよ」

「じゃ、それ。それにある」

「ひとつりスイーツ好きのハルナは繋の定乗つてました。

幸い暇な時間帯なので、ひとつち側のダイニングはあたしに任せている。

忙しい時間は過ぎ、おばさんもあがりが近いのでチェックが甘い。

あたしは雪菜さんにおもわつたチヨコナッシサンターのティラミス版をすばやくつぶしとハルナの席にもつていつた。

「雨、降つてあがつたよ」

ひとつとアイスクリームのコーナーに行つてゐる間に、外は激しく雨が降り出しつてきた。

せつかくあがりなのに、タイミングの悪い……。

今、外に出たらびしょぬれになつてしまつだらけ。

着替えたあたしは仕方なく、ハルナの前に座つた。

幸いあたしの引き継ぎは雪菜さんだったので、気兼ねはいらない。

雪菜さんは

「アリヤちゃんにもナッシュもついてるのか？ 従食料費で」

と顔をかけてきた。

本当は従食は裏で食べないといけない。表で食べる分は正規の料金を払わないといけないあまりになつていて。

だけど店長もいないので雪菜さんが気を利かてくれたのだ。

「あたしセ」

座つてほつとちる聞もなく、半分くらい食べ終わつてこのサンダーを超えるよつこにしてハルナが身を乗り出してくれた。

なに、と聞く前に、ハルナはいたずらっぽい顔をして小さな声で言った。

「やつたよ」

「うわー」

思わず反射的に大きな声を出したあたしに、ハルナはシーツと指を立てる。

「××くんと？」

ハルナはにんまりとうなづく。

こないだの合コンの一人だ。お互に気が合って、ときどきトークしてたつて聞いてた。

いつ。どう。どんなふうにやうなったのか。

具体的なことを聞くよ。

驚いたあたしはただ、ただ、絶句していた。

女子中出身のハルナをあたしは見くびっていた。

過激なことにはこがれつつも、それは口だけで、実際にはウブで奥手だと思つていて。

踏み出すことなんかできやしないと、思いこんでいた。

そんなハルナが。

「……そう。よかつたじやん

そういうのがせいいつぱいだった。

「で、どうだった

「どうして。……別に」

反射的にあたしは軽く睨んだかもしれない。

だって、その答えこそ、向こう側にいた人の典型的な考え方だから。

それに気づいたのか、ハルナはつづくと笑つて

「アリサだつてもつすぐなんでしょう」

話をあたしに振つてきた。

「あ～、あたしは……」

あたしは窓の外に目をやつた。

激しい雨が、道路にしづきをあげている。

あのときのようにな。

もう一ヶ月以上経つてしまつた。

ちゅうじやのとき、雪菜さんがチヨコナッツサンデーを持ってきた。

雪菜さんの作ったサンデーはあたしがつくれたのよつまつときれいだ。

そのきれいなホイップにロングスプーンを突き刺しながら、

「あたしは、ないかも」

あたしはできるだけそつけなく言った。

「なんで。バイトの人といい感じだったんじゃないの？」

無遠慮なハルナの声が聞こえているんじやないかとあたしは田の端で雪菜さんをチェックした。

幸い雪菜さんは客席に背を向けて「コーヒー」を新しくセットしているようだった。

「コーヒー」メーカーのセットは雪菜さんが好きな仕事だ。

だからたぶん、大丈夫。

「最近、バイト来ないし。もしかして嫌われたのかも」

あたしはできるだけ声を落して言った。

「ええー」

「もういい。もっと他の人がいるかもしれないし」

「でもー」

「それよりさ。ハルナの話を聞かせてよ……」

あたしは無理やり話を変えた。

それがせいいつぱいだった。

次の日も朝からバイトだった。

「おはようございます」

あたしは裏に入ると言をあげた。返事はない。

裏には誰もいないらしい……と思つたら、スタッフ用の椅子をつなげて誰かが寝ている。

顔のあたりを店のジャンバーで覆つているから誰かはわからぬけれど男性だ。

あたしは氣にもとめなかつた。

朝よく見られる光景だから。

深夜あけの店長や社員がよくしゃつて仮眠をとつてゐることがある。

朝だけ休んで、忙しいランチ時をこなしてから帰宅するのだ。

今日は制服をチョンジするか。

そつ思つてビニールのついた制服をあつたいたときだ。

「嫌つてないよ」

と背後から声がした。

びっくりしてふりかえると、山上さんがあむりへつ起き上がるといひだった。

そこへ寝てたのままに彼だったのだ。

「へい。

そのときは、山上さんが何を嫌つてないのか、頭の中でつながりずっとあたしはただ山上さんの存在に、言葉ごと息をのみ込んだ。

「おまえ

山上さんばかりでこなつた頭を搔きながら、ぱーん、と放り投げるみつこつてよこした。

あたしがそれに返事をするまえに「てかわ」と山上さんは続ける。

「なんで嫌われてるとか思つたわけ?」

あたしの脳は……生クリームみたいになつてたに違いない。

あまりに驚いて、その話が何から続いているのか、まだよくわからず、ただただ山上さんの顔を見ていた。

「ねえ

山上さんは黙そうだった田舎、やや見開いた。

もしかして、山上さんに嫌われたのかもしれない、とひそかに傷ついていたのは事実だ。

でもあたしの心の中をなんで見透かされたのか。

この期におよんで、あたしはまだ、わかつていなかつた。

あたしは焦つて

「なんの話ですか？」

などとしきりぱつくれてしまつた。

すると、山上さん

「え？ あれ？ あれー？」

とあたしを指さしてキョトンとした。

あたしの心臓はバクバクどじりがじやなかつた。

心の中を知られるのが怖くて。

それと、最初に聞いた『嫌つてないよ』といつ声が、安堵になつて心にひろがつっていく。

なぜか、それを見破られたらいけないと思つた。

「もう、なんですかあ？」

あたしは必死で苦笑をする。ばれやつて怖い。綱渡りのよがだ。

山上さんはあたしが心の中で綱渡りをしてくるとは知りません、

「こやや、雪菜にさ、アリサちゃんが俺に嫌われてるつて、泣いてるつて聞いたんだけど」

ああ。

あたしはやつやく納得した。

昨日の、ハルナとの話を、雪菜さんは背中で聞いてたんだ。

「あたし、そんなことってないです」

みつやく想い出したのと、なぜかウソが口をついて出てしまった。

なんでそんなウソが出てきたのかわからない。

「マジかよ。くつや、雪菜のやつー」

山上さんはあたしの言葉を信じたのか、やも梅しそうに胸のところで両手に作った拳をあわせた。

ああ、あたしは雪菜さんをウソつきにしてしまった。

罪悪感で顔に血が集まつて、一度、山上さんに背を向けると制服

あたしはそれを隠すやつもつー一度、山上さんに背を向けると制服

をさがすフリをした。

本当は田の前にジャストサイズはあった。

だけどなかなか見つからぬふりをする。

「アリサちゃん」

一言前とは打って変わった優しい声が聞こえた。あのときの。雨の車の中でのような。

振り返っちゃいけない、気がした。

「なんですか」

そっけなく何気なく答えたかったのに、語尾がいまいち決まらない。

「私服だと大人っぽいね」

「そんなこと……」

あたしはいよいよ振り返れなくなつた。

自転車をこいできたあたしは暑くて、キャミの上にきていた薄いパーカーを脱いでいた。

露出した背中に夏の太陽より強烈に山上を人の視線が注いでいる気がした。

背中と、顔が、熱い。

つまべ話せない。言葉は中途半端にとぎれてしまつた。

同じことを他の人にいわれたなら

『やうでしょ、やうでしょお?』

とキメてみせるべつにの天真爛漫さを表つべつにわけないの。

途切れた言葉を「まかすよつ」と

「山上さん、同じことに顔見なかつたけビビつしたんですねか」

と訊いてみる。

それもトチリやつで、無意識に口の中で一度練習してからやつと書にする。

「んー。新しい店のヘルプと、大学の前期試験

のんきな感じの山上さんの声が少しだけあたしを緊張から解き放つ。

「ヘルフ?」

あたしは振り返れないまま、訊き返す。

「うん。空港バイパス店の。なんか急に人が足りなくなつたとかで。
……俺、車持つとあやん。だから店長に頼まれて」

なるほど、交通の便がこじよつもよくなつて空港バイパス店のバイト

はほとんどみんなマイカー通勤だね。

「 もういじめつかわれるわ、いじめつかわれるわ、で、で、それが終わ
つたら大学の前期試験だろ」

おやむおやむ首を45度だけ回転させる……山上わんが大きく伸び
をしてこるのが田の端につつる。

「 もういじめ。やつと昨日で試験も終わって、夏休みだしー」

なんだ。

あたしを避けてたんじゃなかつたんだ。

「 セウだつたんですかー」

振つ返つたあたしは、山上わんと田が合つてハツとした。

あまりに安心しすぎて、緊張も演技も忘れてしまつたらしい。

照れそにになつたあたしに、山上わんは朝の光の中ドリツヒツとほ
ほ笑んだ。

「 だからね。いろんな遊びで元氣になつよ」

罪のないスーパーのよつた笑顔で山上わんはあたしを誘つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8956d/>

うしなったもの、まもるべきもの

2010年10月13日14時39分発行